

北川博邦
編

清人篆隸字彙

此乃傳記

清

人

表

親

字

集

北川博邦編

清人篆隸字彙

雄山閣出版刊

序

二十年程前、ちよつとしたきつかけから松丸東魚先生に篆刻を學ぶやうになり、ある時、清人の篆隸を集めて字書を作りたいと希望を述べたところ、それはたしかに便利にはなるが、そのやうなものを作ると、ただでさへ勉強しない連中が、ますます勉強しなくなる、とあまり賛成ではない御様子であつた。それなら自分の爲に作らうと思ひ、自ら寫眞をとり、切つたり貼つたりしてゐた。そのうちに縁有つて、伏見冲敬先生の書道大字典の仕事の御手傳をさせていただくことになり、これにより書體字典の作り方の要領を覺えた。この間にも、たつた一人の字典作りは續いてゐたのである。

篆隸の字典は昔からすくなくはないが、學者向のものはあまりに専門的に過ぎるとともに直ちに揮灑の用に立て難く、書家向のものは孟浪杜撰が目につく。それ故、自ら使ふ爲にも自ら作らなければならず、直ちに揮灑の用に立ち、しかも正確なものでなければならぬ。そこで出來たものが本書である。直ちに役立つものとする爲に清人の書跡をとり、正確を期する爲に說文解字と隸書偏傍五百四十部とを併せ録することとした。欲を言へばきりが無いが、これでほぼ所期の

目的に近いものになるかと思ふ。

その後、ふとしたことから雄山閣とつながりが出来た。編集長の芳賀章内氏は一寸變つた人で、どういふわけか、あまり賣れさうにもない偏類碑別字といふ本を出してくれた。私は大いに嬉しかったのだが、果して儲るほどには賣れなかつた。それでもこの本は、先頃の稻荷山鐵劍の銘文の解讀に一役買つたといふことであるから、決して無駄なことではなかつたと思ふ。さて、その埋合せの爲に何か賣れさうな本を作らなければいけないといふので出て來たものが本書である。この計劃には芳賀氏も太いに乘氣になり、全面的な支援を約束してくれた。たつた一人の字典作りが、かうして大勢の人の手を借りて進めることが出来るやうになつたのである。

この三年、雄山閣の五階の一室が字書編纂室となり、數人の有能なる友人が核となり、多くの人の助力を得られるやうになつた。實際の作業は佐野光一君を中心とし、筒井茂徳・佐野榮輝・蓑毛政雄・須田義樹・石井清和その他の諸君の手により急速に進み、私は作業の方向を指示し、その結果を點檢するだけでよいことになつた。佐野榮輝君は國學院大學で私の講義を受けた緣によるが、他の五君は嘗つて伏見冲敬先生の書道大字典・角川書道字典などで仕事をともにして以來の友人である。これらの諸君の中でも、佐野光一・筒井茂徳兩君には、特に多くの世話になつた。

佐野光一君は、その性眞摯好學にして溫厚篤實であり、東京教育大學大學院書專攻を出、今は和光大學・國學院大學等に出講する傍ら、本書作成の爲の作業日程、作業人員の割振など一切の

計劃を取仕切り、自ら先頭に立つてこの仕事を完成してくれた。

筒井茂徳君は、東京教育大學書專攻を出、佐野君には先輩にあたり、特に初等中等教育に理想と抱負とを有してゐる。その性は細心にして剛直、一事も苟くしない。それ故、殊に面倒な本書の索引の作製を一手に引受けてくれた。

この仕事は、篆・隸書の字典を作るといふ特殊な性質をもつため、なまじ少しばかり字を知つてゐるとか、お習字をしたとか、漢文が讀めるとかいふ程度の知識能力の者では全く用に堪へない。以上の六君の知識能力はみなよく其の任を全うするに足るものであり、今や篆隸書に關する知識に於てこれらの諸君の上に立つことの出来る人は一體幾人あるであらうか。前の書道大字典・角川書道字典の場合もさうであつたが、仕事の性質上、字書編纂室は一種の書學教室を兼ねるところがあつた。これらの諸君によつて、我が邦の書道界の學問的水準が支へられる日が遠からず來ることを私は確信するものである。

なほ、ここには一々その名を擧げるには及ばなかつたが、他にも大勢の人々の助力を得た。殊に最後の三ヶ月程は、前記の諸君を中心とし、日曜祭日もなく、夜遅くまで働いてくれたことは、感謝する言葉もない程である。

更に伏見冲敬先生には、たびたび指導を仰ぎ、その上資料の提供をも賜り、比田井南谷・小林斗盦兩先生からは、資料の提供を賜つた。謹んで御禮を申上げるものである。

また、多額の費用を必要とするこの種の字典の刊行をいとも簡単に承諾された雄山閣出版社長

長坂一雄氏と、本書作成上の細かい要望を殆んど聞き入れてくれた編集長芳賀章内氏の宏量にも御禮を申上げたい。

私は前から一度は検印といふものを押してみたいと思つてゐた。私も昔は篆刻を書道展に出品したこともあるので、自ら刻して一千部ごとに印を改めて押すつもりでゐたが、二十年來の畏友である關正人氏が、いくつでも雕るからは非使つてくれといふので、その好意に甘へることにした。私が印を雕らなくなつてからもう十餘年にもなるので、しばらく見ない間に大分腕を上げたなどと思はれても一寸面映ゆいので、念の爲一言申添へておく。

いかに心力を盡さうとも、一人の力は極めて小さく、且つ限りがある。本書もまた上述の如く多くの人々の助力によつて漸くここに形を成すに至つた。今年は私も四十路にさしかかり、つひに初老となつた。本書の完成は、圖らずも私の前半生に區切をつけるものとなつたわけである。

本書は、書體字典としては、その採録の範圍をかなり特殊な分野に限つたもので、此の種のものとしては初めての試みであるといへやう。それ故、その内容には、なほ議すべきものも多いことと思ふ。多くの人々に活用せられ、且つまた御高教を賜はらんことを願ひする。

昭和五十四年六月二十一日

北川 博 邦 識

例言

篆・隸書を學ぶには、三代秦漢に溯つて、その遺跡につくのが最もよいことはいふまでもないが、それらは、必要とする文字をすべて集めることが甚だ困難であり、また剝蝕磨滅も多く、その結構・筆意も明らかに知りがたい。その揮毫にあたりて直ちに役立てる爲には、篆・隸の書法を復興して、更に新意を出した清代の諸名家の書跡を参考とすることが最も捷徑である。それ故、ここに清人の篆・隸書を集めて字書と成し、清人篆隸字彙と名づけた。

採録の範圍は、清初より清末民初に至る、一部近人をも含む有清一代の篆隸の名家二百二十一家に及び、主要なる書人はすべて網羅した。

收録するにあたりては、もとより眞僞を峻別すべきであるが、本書に於ては極めて少數ではあるが、僞跡とされるもので敢へて收録したものがあつた。それは、たとひ僞跡であつても、それぞれの風をよくした同時代人の手に成るものであり、且つ眞跡にその字が求められなかつた場合もあり、その筆意・結構がなほ参考に資するに足るものがあると考へたからである。收録の文字は、大なるものはこれを縮小し、はば字大を同じくするやうにつとめた。

清人の篆・隸は、ほぼ二千年にわたつて中絶してゐた筆法を復興し、折しも興起した金石考證の學の成果をも取入れたもので、書家・印人の好模範であることはいふまでもないが、時にはその點畫の舛譌したものがないとはいへない。それ故、その正體を示す爲に、篆書については説文解字をその説解とともにすべて收録し、隸書については顧藹吉の隸書偏旁五百四十部をその注とともに收録した。なほ「説文解字」は、一般に標準とされてゐる宋の徐鉉の校定になる所謂「大徐本」の中から清の朱筠の校刊本を用ひた。それ故、新附をも收録したことはいふまでもない。ただし、該書の篆文には時に誤刻もあるもので、特にその甚しきものについては一部修正補筆したところもある。また、説文解字には逸漏もあるので、清の鄭珍

例言

の「説文逸字」により補つたものもある。説文解字については、特に書名を標示しなかつたが、新附は「説文新附」、逸字は「説文逸字」とそれぞれ本文中の該字下に標示した。

排列は、部首別畫數順とし、康熙字典の次序に従つた。その重文のあるものは、首に説文解字、または説文新附もしくは説文逸字、次いで清人の篆書、次いで隸書を、それぞれ書人の時代の先後を以て排列し、隸書偏傍五百四十部は、それぞれの隸書の首に置いた。説文解字を部首別畫數順に排列したものは、本書を最初とする。

見出し字は、おほむね説文の首文を以てした爲、重文はその下に列することとした。それ故、一例を挙げれば、其・馭・學・於の如きは、それぞれ箕・御・敎・鳥の字の下に排比されてゐる。ほかにもこの類のものがすくなくないので、檢索にあたりては、索引を活用されるやうに望むものである。

現今通行の字で説文に無き所のものは多いが、それらについてはそれぞれ該字見出しの下に注を附し、篆書の某字に作るべきことを示した。説文所無の字を、その楷書の形のまゝに篆書の點畫を湊合して作り成すが如きは嚴につつしむべきであり、必ずその本字を求めて書かなければいけないものである。本書に收録した清人の篆書の中にも、このやうな湊合作成になるものがすくなくないが、これは結字・筆法の參考の資として挙げたに過ぎず、直ちにこれを取りて倣ひ用ひてよいといふものではない。しかし、それが人名や地名、また國字、特に我が邦人の氏である紳・辻・畠などの固有名詞に用ひられ、妄りに變改することを許されないものについては、時として楷書の點畫をそのまま篆書化することも已むを得ないこともあらう。また隸書が通行してゐた時代にはまだなかつた字、たとへば暮・影・花・村などの後出字についても同斷である。楷書の點畫をそのままに、ただ横畫の末筆をはねれば隸書になるといふやうな簡單なものではないことを心得られたい。しかし、本書に於ては、残念ながらそこまで及ぶことは出来なかつた。

收録した文字の中には、往々にして末一畫を闕くものがある。玄・胤・弘・寧などがそれであり、まれにはこれらの字が旁になつた場合にも闕いてゐる例がある。これは避諱闕筆と呼ばれるもので、皇帝などの諱を避けて末筆の一畫を書かない風習によるものである。清代の諱例は時には厳しく時には寛やかでもあつたので、或は闕き或は闕かないこともある。凡そ書體字典を用ひて揮灑の用にあてゐる場合、避諱缺筆を知らずしてそのままの形に寫すと、時として不學無識の譏を招くこと

本書の首に收載書人生卒年表、尾に説文解字建首・總畫索引を附した。收載書人生卒年表はほぼ生卒の先後を以て排比し、その年次の徴すべき無きものは、末に順不同に列した。もし未詳の人につき知る所があれば高教を賜はりたい。總畫索引に列する所は、見出し字のみに止まらず、説文の古文・奇字・籀文・或體・俗體等をすべて網羅し、更に本書中に收録した別體にも及び、能ふかぎり完璧を期した。

7

收載書人生卒年表

徐眞木 しんぼく	明末清初人
鄭鑑 ていけん	明天啓二（一六二二）—清康熙三二（一六九三）
陳恭尹 ちんきん	明崇禎四（一六三一）—清康熙三九（一七〇〇）
徐秉義 けいぎ	明崇禎六（一六三三）—清康熙五十（一七一）
孫均 そんぐん	明崇禎一四（一六四二）—清康熙五八（一七一九）
張在辛 ちやうしん	順治八（一六五一）—雍正一三（一七三五）以後
萬經 ばんけい	順治一六（一六五九）—乾隆六（一七四一）
王澍 じゆう	康熙七（一六六八）—乾隆八（一七四三）
顧藹吉 あいきつ	康熙時人
周綵 しゆうさい	康熙乾隆間人
魯燮光 しやうこう	
金農 きんのう	康熙二六（一六八七）—乾隆二九（一七六四）
丁敬 ていけい	康熙三四（一六九五）—乾隆三十（一七六五）
何琪 かき	
惠棟 けいとう	康熙三六（一六九七）—乾隆二三（一七五八）
黃樹穀 じゆうこく	康熙四十（一七〇一）—乾隆一六（一七五五）
蔣溥 はくしゆう	康熙四七（一七〇八）—乾隆二六（一七六一）
徐堅 けいけん	康熙五一（一七一一）—嘉慶三（一七九八）
童鈺 どうぎよく	康熙六十（一七二一）—乾隆四七（一七八二）
汪士慎 ししん	雍正乾隆間人
楊法 はうほう	
江恂 じゆうん	雍正乾隆間人、乾隆一八年拔貢
戴震 たいしん	雍正元（一七二三）—乾隆四二（一七七七）
汪啓淑 けいしゆく	雍正六（一七二八）—嘉慶四（一七九九）
錢大昕 だいいしん	雍正六（一七二八）—嘉慶九（一八〇四）

桂馥 けいふ	雍正一一（一七三三）—嘉慶七（一八〇二）
張燕昌 ちやんしやう	乾隆三（一七三八）—嘉慶一九（一八一四）
董洵 とうしゆん	乾隆五（一七四〇）—嘉慶一四（一八〇九）
董誥 とうこう	乾隆五（一七四〇）—嘉慶二一（一八一八）
錢坫 せんてん	乾隆六（一七四一）—嘉慶一一（一八〇六）
鄧石如 せきじや	乾隆八（一七四三）—嘉慶十（一八〇五）
趙秉冲 ちやうしゆう	乾隆四七年舉人
巴慰祖 はいそ	乾隆九（一七四四）—乾隆五八（一七九三）
黃易 わうい	乾隆九（一七四四）—嘉慶七（一八〇二）
武億 ぶい	乾隆十（一七四五）—嘉慶四（一七九九）
奚岡 けいこう	乾隆十一（一七四六）—嘉慶八（一八〇三）
朱文震 ぶんしん	乾隆間人
洪亮吉 りやうきつ	乾隆一一（一七四六）—嘉慶一四（一八〇九）
趙魏 ちやうゑ	乾隆一一（一七四六）—道光五（一八二五）
陳鱣 ちんぜん	乾隆一八（一七五三）—嘉慶二二（一八一七）
孫星衍 せんせい	乾隆一八（一七五三）—嘉慶二三（一八一八）
伊秉綬 いへいしゆう	乾隆一九（一七五四）—嘉慶二十（一八一五）
李庚芸 りこうん	乾隆一九（一七五四）—嘉慶二二（一八一七）
凌廷堪 りやうかん	乾隆二一（一七五五）—嘉慶一四（一八〇九）
胡唐 ことう	乾隆二四（一七五九）—道光六（一八二六）
錢泳 せんえい	乾隆二四（一七五九）—道光二四（一八四四）
鈕樹玉 じゆうしゆく	乾隆二五（一七六〇）—道光七（一八二七）
張惠言 けいげん	乾隆二六（一七六一）—嘉慶七（一八〇二）
陳豫鍾 ちんしゆう	乾隆二七（一七六二）—嘉慶一一（一八〇六）
紀大復 だいく	乾隆二七（一七六二）—道光一一（一八三一）

收載書人生卒年表

嚴可均げんかきん 乾隆二七（一七六二）—道光二三（一八四三）
 辛開しんかい
 夏之勳かしくん
 焦循じょうじゆん 乾隆二八（一七六三）—嘉慶二五（一八二〇）
 阮元げんげん 乾隆二九（一七六四）—道光二九（一八四九）
 江鳳彝かうほうい 嘉慶四年舉人
 黃學杞かうがくき 嘉慶道光間人
 顧廣圻こくくわうき 乾隆三一（一七六六）—
 錢鴻禹せんかうう 乾隆三二（一七六七）—
 陳鴻壽ちんかうじゆ 乾隆三三（一七六八）—道光二（一八二二）
 高日濬かうじつしゆん 嘉慶間人
 張廷濟ちやうていき 乾隆三三（一七六八）—道光二八（一八四八）
 李兆洛りちやうらく 乾隆三四（一七六九）—道光二一（一八四一）
 瞿仲溶くちゆうじよう 乾隆三四（一七六九）—道光二二（一八四二）
 張鏐ちやうりゆう 乾隆三四（一七六九）—道光元（一八二一）
 陳希濂ちんきれん 嘉慶四年舉人
 姚元之ぎやうげんし 乾隆三八（一七七三）—咸豐二年（一八五二）
 徐同柏じよどうはく 乾隆四十（一七七五）—咸豐四（一八五四）
 翟云升たいてきしやう 乾隆四一（一七七六）—咸豐十（一八六〇）
 錢侗せんとう 乾隆四三（一七七八）—嘉慶二十（一八一五）
 湯貽汾とういふん 乾隆四三（一七七八）—咸豐三（一八五三）
 周夢台しゆうむたい 乾隆四五（一七八〇）—道光一九（一八三九）
 馮登府ふうとうふ 乾隆四五（一七八〇）—道光二一（一八四一）
 屠倬とろたく 乾隆四六（一七八一）—道光八（一八二八）
 趙之琛ちやうちん 乾隆四六（一七八一）—咸豐十（一八六〇）
 江尊かうそん 道光間人
 石渠せききやう
 范永祺はんえいき 乾隆五一年舉人
 程荃ていせん
 嚴坤げんこん

馮承輝ふうじやうき 乾隆五一（一七八六）—道光二十（一八四〇）
 許棧しよけん 乾隆五二（一七八七）—同治元（一八六二）
 謝景卿しやけいけい
 伊念曾いねんそう 乾隆五五（一七九〇）—咸豐一一（一八六一）
 釋達受しやくたくじゆ 乾隆五六（一七九一）—
 錢元章せんげんしやう
 趙懿ちやうい
 胡培かうばい 道光間人
 鄧傳密てうみつ 乾隆六十（一七九五）—同治九（一八七〇）
 鄭汝霖ていりん 咸豐貢生
 沈銘彝しんめいい 嘉慶時人
 江德地かうとくち 嘉慶道光間人
 鍾權しゆうけん 嘉慶道光間人
 吳讓之ごじやうし 嘉慶四（一七九九）—同治九（一八七〇）
 吳育ごいく
 何紹基かしょうき 嘉慶四（一七九九）—同治一二（一八七三）
 吳廷康ごていこう 嘉慶四（一七九九）—同治一二（一八七三）
 陳潮ちんちやう 嘉慶六（一八〇一）—道光一五（一八三五）
 劉喜海りうきかい 嘉慶二一年舉人
 沈兆霖しんちやうりん 道光一六年進士
 張熊ちやうしやう 嘉慶八（一八〇三）—光緒一二（一八八六）
 錢松せんせん 嘉慶一二（一八〇七）—咸豐十（一八六〇）
 馮桂芬ふうけいふん 嘉慶一四（一八〇九）—同治一三（一八七四）
 陳澧ちんれい 嘉慶一四（一八〇九）—光緒八（一八八二）
 莫友芝もくゆうし 嘉慶一六（一八一一）—同治十（一八七二）
 吳雲ごうん 嘉慶一六（一八一一）—光緒九（一八八三）
 楊翰やうかん 嘉慶一七（一八一二）—光緒五（一八七九）
 楊沂孫やうしん 嘉慶一七（一八一二）—光緒七（一八八一）
 吳咨ごし 嘉慶一八（一八一三）—咸豐八（一八五八）
 汪鏐わうろう 嘉慶二一（一八一六）—

收載書人生卒年表

徐樹銘 道光二十七年進士—光緒二六(一九〇〇)
龔 橙 嘉慶二二(一八一七)—
胡 震 嘉慶二二(一八一七)—同治元(一八六二)
楊 峴 嘉慶二四(一八一九)—光緒二二(一八九六)
陳允升 嘉慶二五(一八二〇)—
俞 樾 道光元(一八二一)—光緒三二(一九〇六)
徐方增 道光二(一八二二)—光緒三(一八七七)
姚孟起 道光間人
許 威 道光間人
丁文蔚 道光間人
謝庸 道光間人
沙神芝 道光間人
魏 耆 道光間人
江清驥 道光二十年舉人
徐 林 道光咸豐間人
徐 康 道光咸豐間人
何 澂 道光咸豐間人
葛 同 道光咸豐間人
葉道芬 道光咸豐間人
任 淇 道光咸豐間人
華 復 道光咸豐間人
蔣 節 道光同治間人
胡 澍 道光五(一八二五)—同治一(一八七二)
徐三庚 道光六(一八二六)—光緒一六(一八九〇)
趙之謙 道光九(一八二九)—光緒十(一八八四)
張 度 道光十(一八三〇)—光緒二一(一八九五)
翁同龢 道光十(一八三〇)—光緒三十(一九〇四)
胡義贊 道光一一(一八三一)—
趙烈文 道光一二(一八三二)—光緒一九(一八九三)
周星詒 道光一三(一八三三)—光緒三十(一九〇四)

姚正鏞 道光光緒間人
蔡鼎昌 道光光緒間人
廖 綸 道光光緒間人
汪士驥 道光間人
吳大澂 道光一五(一八三五)—光緒二八(一九〇二)
戴 望 道光一七(一八三七)—同治一二(一八七三)
曾紀澤 道光一九(一八三九)—光緒一六(一八九〇)
徐惟琨 道光一九(一八三九)—光緒二三(一八九七)
李嘉福 道光一九(一八三九)—光緒三十(一九〇四)
汪鳴鑾 道光一九(一八三九)—光緒三三(一九〇七)
楊守敬 道光一九(一八三九)—民國三(一九一四)
凌 霞 道光二四(一八四四)—民國一六(一九二七)
吳昌碩 光緒三年進士
王 同 道光二五(一八四五)—光緒二六(一九〇〇)
王懿榮 道光二九(一八四九)—光緒三四(一九〇八)
黃士陵 道光二九(一八四九)—
張祖翼 道光三十(一八五〇)—民國十(一九二一)
高 邕 咸豐元(一八五一)—民國九(一九二〇)
陸 恢 咸豐光緒間人
童大年 咸豐光緒間人
褚德彝 咸豐光緒間人
錢慶曾 咸豐光緒間人
江 沅 咸豐光緒間人
高保康 咸豐光緒間人
包虎臣 咸豐光緒間人
黃山壽 咸豐五(一八五五)—民國八(一九一九)
楊 銳 咸豐七(一八五七)—光緒二四(一八九八)
江 標 咸豐十(一八六〇)—光緒二五(一八九九)
左運奎 同治光緒間人
王爾度 同治光緒間人

收載書人生卒年表

高行篤	同治光緒間人
張景祁	同治光緒間人
陶在寬	同治光緒間人
吳隱	同治光緒間人
吳傳經	同治光緒間人
方朔	同治光緒間人
伊立勳	同治光緒間人
陳彭壽	同治光緒間人
毛承基	同治光緒間人
何震	同治光緒間人
傅枋	同治光緒間人
方鎬	同治光緒間人
田潛	同治光緒間人
仰嘉祥	近人
羅振玉	同治五(一八六六)―康德七(一九四〇)
趙時綱	同治一三(一八七四)―民國三四(一九四五)
汪仁壽	近人
宋文蔚	近人
秦文錦	近人
王慧	近人
丁佛言	光緒四(一八七八)―民國一九(一九三〇)
王昶	光緒六(一八八〇)―民國四九(一九六〇)
王雲	光緒一四(一八八八)―民國二三(一九三四)
何璵	
李椿林	
李輔耀	
沈基庶	
祁文藻	
姚士璋	

唐翰題	
徐份	
高爾燮	
張齊	
章鐘	
莊廣良	
郭鍾璘	
陳志寧	
彭慰祖	
費正高	
馮遵建	
萬庭珩	
裘春湛	
蒯關保	
趙福	
趙瞳	
鄧奎	
錢廷煥	
濮士鈴	
嚴朱點	
顧燮光	

引

— 1、2、3

書

二九 二五 一六 一五 一二 一

၉



川

兀九
允

二二
二二七
二二六
二四〇
二四一
二四二
二四六
二五八
二七七
二八七
三〇九
三一四
三一八
三二〇
三二六
三二七
三三六
三三九

+

夕

无

父

持

4

三九九
四三五
四四三
四四六
四七三
四七三
四八七
四九〇
四九一
四九四
四九九
五〇一
五一二
五二七
五三五
五八二
五八八
五九六
五九九
六〇二

同老

同网

同网

同平

同王

同九

方

生

7

1

4

1

六〇四
六〇五
六〇六
六〇九
六一〇
六六五
六八四
六八九
六八九
六九一
六九二
六九三
六九四
六九八
三三八
七〇九
七八六
七八五
八七五
八八八

(111)

正·正

E

之

++
[一]

月
同

九〇五
九三九
二一八
七〇八
七〇九
七二三
七二四
七二七
七二八
七二九
七三二
七四一
七四二
七四九
七五一
七五六
七五七
七六一

二八

九三九

九〇五

清人篆隸字彙

北川博邦編

一 部

①

惟初太始道立於一造分天地
化成萬物凡一之屬皆从一切悉

古文

王 謝

鄧 石 如

錢 坫

孫 星 衍

嚴 坤

沙 神 芝

吳 讓 之

莫 友 芝

楊 沂 孫

胡 謝

徐 三 庚

趙 之 謙

吳 大 澂

吳 昌 碩

王 禔

一與說文同數始於一故以一爲端亦作一從一之字丕變作丕
譌從十寸變作寸譌從點從一從山之字或變從一見山字下

鄭 蘊

顧 藹 吉

金 農

鄧 石 如

奚 岡

伊 秉 綬

姚 元 之

陳 鴻 壽

吳 讓 之

何 紹 基

錢 松

莫 友 芝

楊 峴

俞 樾

趙 之 謙

陳 鴻 壽

趙 之 謙

趙 之 謙

趙 之 謙

趙 之 謙

趙 之 謙